

2008年度日中企業連携会議報告

日中企業連携PJ*

抄録 2008年度・日中企業連携プロジェクト活動の総決算として、北京市と上海近傍の南通市で、日中企業連携会議を開催した。それぞれ、2009年2月26日（北京）、3月18日（南通市）に開催、北京では第3回目、上海では第4回目の開催になった。会議形式は、両会議とも、2グループに分れたディスカッションが中心、議論のテーマは、「戦略的特許網の構築」と「社内知財教育」であった。両方のテーマに関して、日中双方から質問が相次ぎ、時間が足りない場面が多く見られた。

本会議は、回を重ねるごとに、議論に「深み」が増し、日中双方ががっちり噛み合った議論が行われるようになっている。会議終了後は、満足感がたどよい、日中双方、笑顔で再会を誓った。日中企業連携プロジェクト活動を通じた日中交流は、だんだんと深くなっている。

目次

1. はじめに
2. 第3回北京日中企業連携会議
 - 2.1 プログラム
 - 2.2 開催日時、場所、参加者
 - 2.3 会議の概要
3. 第4回上海日中企業連携会議
 - 3.1 プログラム
 - 3.2 開催日時、場所、参加者
 - 3.3 会議の概要
4. おわりに

が開かれている。議論されたテーマは下記のとおりである。

	上海	北京
2006年	「人の管理」「情報の管理」	「管理体制」「出願戦略」「権利活用」「他社権利対策」
2007年	「産学連携の在り方」「大学と企業・契約の留意点」	
2008年	「ブランド管理」「技術管理」	「インセンティブ」「技術管理」
2009年	「戦略的特許網の構築」「社内の知財教育」	「戦略的特許網の構築」「社内の知財教育」

「管理」という漠然としたテーマから始まったが、次第に具体的テーマとなり、2009年は、「特許網の構築」と「社内の知財教育」で議論することになった。本報告では、2009年の会議の内容を紹介する。

1. はじめに

2005年4月15日、上海にて「第1回・日中企業連携・知財フォーラム」が開催され、日本知的財産協会・理事長であった久慈氏と中国専利保護協会・副会長であった胡氏の両名によって、「フォーラム宣言」がなされた。

その中に、「日中の知的財産について継続的に議論を行い、互いの企業連携を深めます」という一文があり、以降、毎年、北京と上海で会議が開かれるようになった。

今回を含め、上海で4回、北京で3回の会議

2. 第3回北京日中企業連携会議

2.1 プログラム

9:00 開会挨拶（中国専利保護協会：胡秘書長、JIPA：鈴木副理事長）

* 2008年度 Corporate Cooperation between Japan and China PJ

- 9:15 基調講演「知的創造プロセスにおける諸問題の検討」下田憲次氏（富士通，特許第一委員会副委員長）
- 10:00 グループ・ディスカッション
- 12:30 昼食休憩
- 14:00 グループ・ディスカッション
- 17:00 講評
- 17:30 閉会

2.2 開催日時，場所，参加者

開催日時，開催場所，参加者は，下記のとおりである。

第3回北京・企業連携会議

日時：2009年2月26日 場所：北京・翠宮飯店

テーマ	中国側	日本側
特許網の構築	天士力(Tasly, 製薬) 華為技術(Huawei, 通信) 中興通訊(ZTE, 携帯電話) 騰訊(Tencent, インターネット) 同方威視(検査機器)	リコー (木村真章) テルモ (大澤孝明) アルプス電気 (秦玉公) 荏原製作所 (松村貴司) JFEテクノ (鈴木元昭) 富士通 (下田憲次)
社内の知財教育	海爾集団(Haier:家電) 伊利(YiLi, 乳業) 正大天晴(製薬) BYDオート(自動車) 中冶賽迪(製鉄エンジ)	パイオニア (高崎敦) パナソニック電工 (何珊妹) 日立製作所 (水野恭滋) セイコエフソン (矢部宏) 中国ホンダ (加藤秀司)

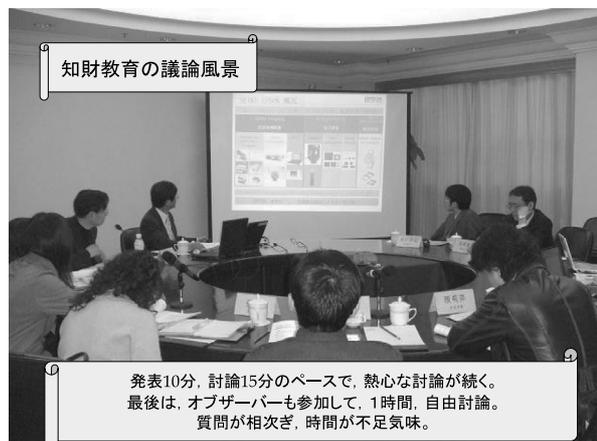
日本側は日中企業連携PJのメンバーを中心に，中国側は，中国専利保護協会（PPAC）が指名した企業で構成されている。中国側は，成長著しい大企業が多く，2008年，PCT出願数で，日本のパナソニックを抜いて世界一になった「華為技術（Huawei）」，携帯電話で急成長した「中興通訊（ZTE）」，世界第四位の白物家電メーカーに成長した「海爾集団（Haier）」などが参加した。上に示した参加者のほか，日本側10名，中国側8名のオブザーバーが参加している。

2.3 会議の概要

基調講演として，富士通の下田憲次氏に講演していただいた。演題は「知的創造プロセスに

おける諸問題の検討」，発明の質と明細書の質の向上に資する知財部門の役割と関与のあり方を検討した内容で，「知財管理」誌，2008年6月号に掲載された論文のエッセンスである。特許網構築の議論のベースになる内容であった。

次いで，2グループに分かれ，ディスカッションを行った。下の写真のような雰囲気での議論が続いた。



それぞれのグループでの内容を概説すると，下記のとおりである。

戦略的特許網の構築（中国側の動き）

- ① 中国企業では，出願規模が急拡大している。たとえば，携帯電話メーカー大手の中興通訊（ZTE）では，2005年・1,227件，2006年・2,657件，2007年・4,994件と倍々の出願件数になっている。
- ② 一方で，先進企業では，数から質への転換が意識されはじめている。
- ③ 権利の評価を実施している企業が多くなっている。コアと周辺の違い，海外出願への展開案件の決定など，戦略的な取組みが行われ始めている。
- ④ 他社権利対策がしっかりと行われるようになってきている。特許情報を使ったライバルの分析，各国の知財環境の把握，海外ライバルの知財力把握などを行っている。

本文の複製、転載、改変、再配布を禁止します。

- ⑤ 三位一体活動も一部の企業で始まっている。

社内の特許教育（中国側の動き）

- ① 知財部門の教育は、外部の研修に参加するケースが多い。研修に関して、政府系機関がしっかりしており、これを利用することで足りている模様である。
- ② 社内知財部門向けには、技術的能力向上の研修も実施している。
- ③ 社内の研究者・技術者向け教育は、自社実施が多い。発明考案規程の説明、啓蒙、知財基礎知識がその内容である。

全体的に（中国側の動き）

- ① 中国側参加者に女性が多い。10社中8社が女性であった。
- ② リーダー層が若い。ほとんどが、20歳代後半もしくは30歳代前半と思われた。
- ③ 日本の知財部門組織に関する質問が多い。若いリーダー層が、次に何をすべきかを、真剣に考え始めている様子が窺えた。
- ④ 昨年に比較し、発言内容が格段にレベルアップしている。将来、中国は日本を追い越す可能性があると感じさせた。

3. 第4回上海日中企業連携会議

3.1 プログラム

- 8:30 開会挨拶（上海市知識産権服務中心：李主任，上海市知識産権局：洪涌清局長助理，上海市科学技術協会：胡家侗副主席，南通市知識産権局：張標，JIPA：鈴木副理事長）
- 9:30 グループ・ディスカッション
- 11:45 昼食休憩
- 12:45 グループ・ディスカッション
- 16:00 全体会議
- 17:00 講評

17:30 閉会

3.2 開催日時、場所、参加者

開催日時、場所、参加者は、下記のとおりである。

今回の開催場所は、上海からバスで2時間ほど離れた「南通市」で開催された。人口800万人の大都市である。

第4回上海・企業連携会議

日時：2009年3月18日 場所：南通市・加州時尚飯店

テーマ	中国側	日本側
特許網の構築	上海家化(化粧品) 上海廣電(ディスプレイ) 上海復星医薬(医薬) 上海建設路橋機械(破碎機) 信上海医薬工業研究院(薬学)	テルモ(大澤孝明) アルプス電気(秦玉公) 荏原製作所(松村貴司) JFEテクノ(鈴木元昭)
社内の知財教育	信誼薬廠(医薬) 上海電気(総合電機) 上海復旦微電子(エレクトロニクス) 上海雷允上薬業(漢方薬) 上海生命科学研究院(ハイオ)	パイオニア(高崎敦) パナソニック電工(何珊妹) 日立製作所(水野恭滋) セイコーエプソン(矢部宏) 東芝テクノ(中山喬志)

日本側は日中企業連携PJのメンバーを中心に、中国側は、上海市知識産権服務中心が指名した企業で構成されている。

北京では、超大企業が集まる傾向にあるが、上海は、会社名の最初に「上海」がついているように上海に在住する中規模の地元企業の参加が多い。また、研究院など、半国家機関も参加している。全般的に元気な企業が多い。

3.3 会議の概要

上海市知識産権服務中心、上海市知識産権局、上海市科学技術協会、南通市知識産権局のリーダーからの挨拶で始まった。それぞれが力を込めて、日中の連携が大事であることを説いた。JIPAからも、お返しの挨拶を行った。

基調講演を省いて、すぐに、グループディスカッションに入った。冒頭から、熱心な議論が続いた。



戦略的特許網の構築（中国側の動き）

- ① 大企業では、特許情報を重視している。特許情報を加工して、研究開発部門に発信するとともに、経営層にも発信している。上海廣電では、「知己知彼，百戦不殆」をキャッチフレーズにして活動を行っている。
- ② 著作権の取得が重要視されている。「キャッチコピーの模倣防止」が主目的である
- ③ 産学連携が盛んである。企業が大学を上手に使っている印象である。
- ④ 上海市が企業に、無料でデータベースを開放している。その他、市独自の出願奨励策を実施するなど、上海市の潤沢な基金を使って知財を重視する活動が盛んである。

社内の特許教育（中国側の動き）

- ① 外部の研修に参加するケースが多い。「上海市專利実務者研修班」「上海市知識産権服務中心の特許情報アナリスト上級研修班」「上海市專利管理エンジニア研修」など上海市

の公的機関がしっかりしており、これを利用することで足りている模様である。

- ② 外部講師を企業に呼んで行う講演会，法律専門家と企業幹部の懇談会などが盛んに行われている。

全体的に（中国側の動き）

- ① 中国側参加者に女性が多い（10社中5社）。とくに大企業のリーダー層が若き女性であり，北京と同様の傾向が認められる。
- ② 上海市の公的機関のサービスが篤い。上海市の潤沢な事業運営費が活用されている。
- ③ 大企業から中企業まで，知財意識が高い。また，北京に対するライバル意識も強い。
- ④ 産学連携が盛ん。公的研究機関も知財の意識を高めようという努力がなされている。

4. おわりに

2008年度も北京および上海で日中企業20社が一同に会し，議論することができた。本会議は2006年から続いているが，年々，深みを増している。2008年度の会議が終わった後，日中双方の参加メンバーが議論に満足し，笑顔で帰っていくことが出来た。中国專利保護協会（北京）とJIPAの関係，上海市知識産権服務中心とJIPAの関係とも，きわめて強固なものとなり，強い絆を形成している。

次頁の写真は，それぞれ，会議終了後の笑顔（北京）および前日のレセプションでの盛り上がり（上海）を撮影したものである。みんな，いい顔をしている。そして，ますます日中企業の結びつきは，強くなっていく。

本文の複製、転載、改変、再配布を禁止します。



(原稿受領日 2009年11月9日)